

ふじ・あしたかの
自然への招待 ④

地質・地形 (No.3)

愛鷹火山のおいたち

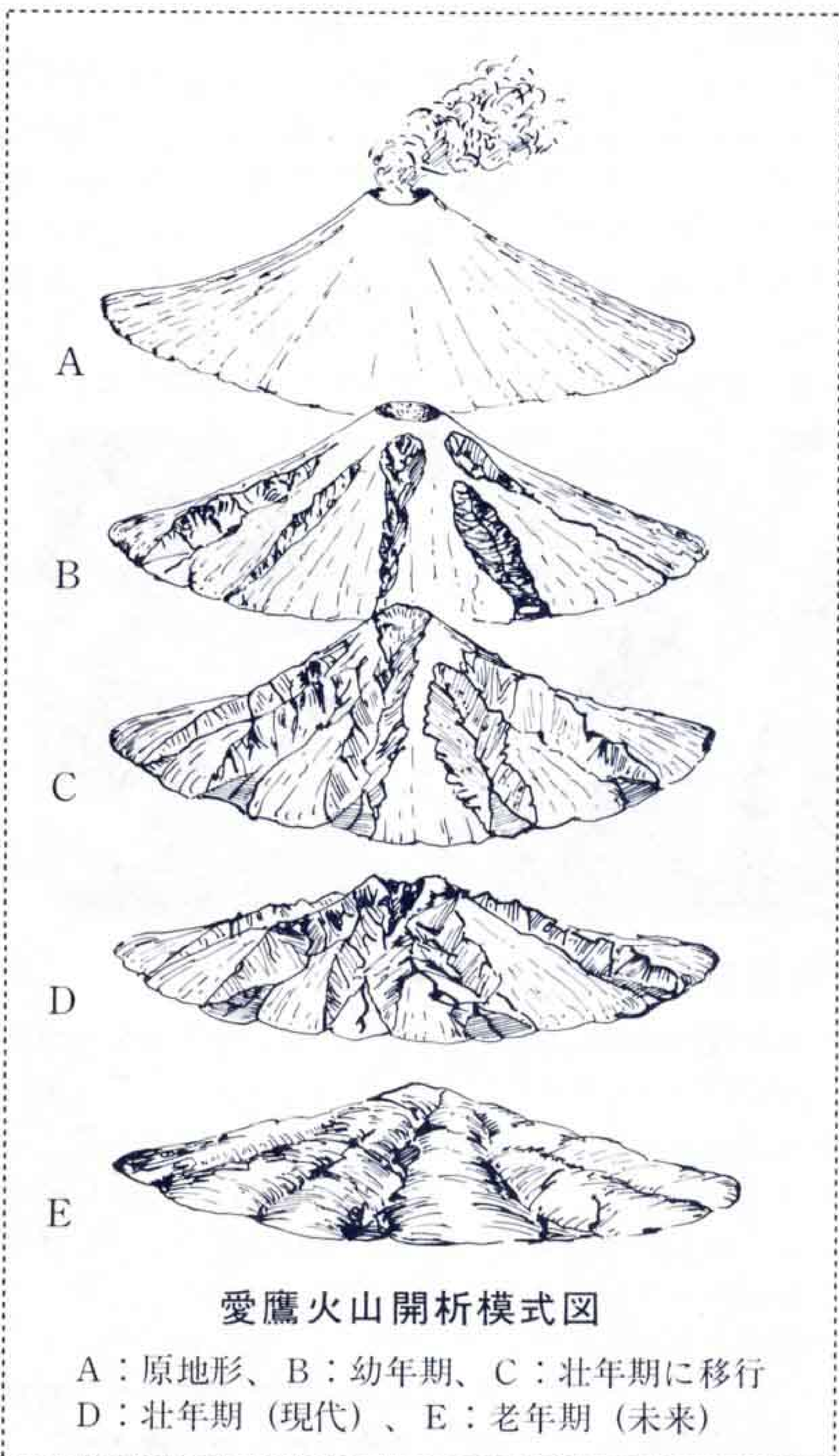
愛鷹火山(あしたかかざん)のできた年代は、はっきりしていませんが、浸食のようすや、溶岩の特徴などから、小御岳火山と同じころと考えられ、前後2回にわかれて噴火しました。

そのころの山は、今の富士山と同じような形をした高さ2,300mほどの山でした。しかし、山体は、長い間の浸食で山頂もなくなり、越前岳(えちぜんだけ) (1,505m)、呼子岳(よびこだけ・1,313m) 大岳(おおだ



大榎の滝 (須津川)

湧き水を集めて地表を流れている水も、この滝の下流で、再び地下にしみ込んでしまう。



愛鷹火山開析模式図

A: 原地形、B: 幼年期、C: 壮年期に移行
D: 壮年期 (現代)、E: 老年期 (未来)

け・1,253m)、鋸岳 (のこぎりだけ・1,296m)、位牌岳 (いはいだけ・1,457m)、愛鷹山 (1,187m) とにわかれて、連峰のような形をした山になりました。これら山々のすべてを含めて「愛鷹山」と呼んでいます。

また、山体には、赤湊川、須津川、春山川、桃沢川大沢など、“百沢、(ももざわ)と呼ばれるほどの多くの谷があります。どこも、両岸が切りたったような深い谷になり、今も少しずつ浸食がすすんでいます。

愛鷹火山の溶岩流にも、水を通しにくい層があります。この地層は、原田・今泉方面にも広く分布しているようです。愛鷹山で地下にしみ込んだ水は、地下水となってこの層にそってふもとに流れています。原田などでは富士山の溶岩の下から、湧き水となってでて

(次回は、「地質・地形」No.4、地質・地形のうつりかわりです。)